

国語音声学A (二〇〇六・春・金四)

土屋博映

☆第一回四月七日(金)

1501教室

「自己紹介」「シラバス」「テキスト」

- 1、(挨拶)「ごきげんよう」で開始。自分が担当した全講義の開始と終了時に必ず行う。
- 2、(レポート用紙配布)裏側に「自己紹介」。講義開始時のレポートも全講義で行う。
- 3、(仮受講表回収)二〇〇名強の受講生。レポート作成時間を使わないと、回収不能。
- 4、(講師自己紹介)アットホームな講義であること、また講義をどういう方針で行うかを伝えた。

5、(講義《授業》の目的等の解説)シラバスをわかりやすく説明する。

6、(講義《授業》)ゆつくりと音声に興味がわくように楽しく講義するようつとめた。

7、(レポート作成)「ごきげんよう」の挨拶。全講義で、講義終了時の挨拶も必ず行う。その後、ミニレポートを作成させるのも同様。最初のレポートが裏側使用で、最後のレポートが表側使用。初回は「授業への期待・希望(感想)」がテーマ。なお、全講義、全提出レポートを採点し、コメントを全員に付け加え、優秀者は氏名を挙げて評価。最優秀は○A(まるえい)とし、最優秀作品は表裏ともに○Aの者。

8、(反省)人数が多い割合にはよく聞いてくれた。1501教室では少し狭く思われたので、次回よりKMHを使用することにした。

☆第二回 四月一四日(金)

メモリアルホール(KMH)

「音声学」「単音」

1、(開始前)今回よりKMHにて講義。前回レポートの返却。今回のレポート用紙・仮履修表は開始前に配布。いずれも壇上に置き、各自が受け取る方式。成績優秀者は、パソコン画面に掲示の上、直接終了時に渡し評価。画面には次のような注意事項を最初に掲示。

【壇上左右にある「レポート用紙」を各自一

枚ずつ受け取ること。「仮履修票」についても未提出の者は、受け取ること。

①表に必要事項を記入(氏名、学年等)

②その上の空欄に「国語音声学 四月一四

日 第二回」と記す。

③裏側に横書きで、「音についてあなたは何を考えるか」を書く(画面)

2、(レポート作成) 本日のテーマは、

「音声」について思うこと。

3、(導入) レポートは一〇分ほどで終了。

講義の方針の説明。第一回目同様、シラバスの概要と、ゆつくりと音声に興味がわくように学んで行く姿勢を強調。

4、(講義) テキストのない学生は全力で

ノートするように伝える。また、次の四点の確認。

「1、テキスト 2、ノート 3、レポー

ト(出席を含む) 4、小論文(試験時提出)」(画面) で評価、どれか一つ欠けても不合格。教育的にはやはり積み重ねを評価したい。

1回 音声学とは(本書の目的と方針)

↓7ページ(テキストページ数、以下同じ)

本講義は『日本語音声概説』(おうふう・

川上葵)をテキストとして行った。

【日本語】とは、東京地方の音声に基づく

現代の全国共通語のこと。

音声の表記はカタカナ、または国際音声記

号(IPA)により、「」に入れて示した。

音の無声化は、小さな△の仮名の後において

表した。「フカイ」(深い、不快) (画面)

日本語は標準語より、共通語と呼ぶのが妥当だというのには多少の驚き。

2回 単音(単音論)

仮名と単音↓11ページ 来週再度解説。

5、(レポート作成と提出) テーマは「本日の感想」。作成後、各自レポートを所定の場所(基本的に学年ごと)に提出。提出した者から授業終了。

6、(反省) メモリアルホールは広くてよい。楽しく講義を進めたつもりだが、学生の気分をゆるませすぎてもいけないと感じた。

感じた。

☆第三回 四月二一日(金)

メモリアルホール

「単音」「音声記号」

1、(開始前) 早めにホールに到着。短時間でパソコンをセットするのは大変。

2、(レポート用紙返却・配布) 壇上左右

にある「レポート用紙」を各自1枚ずつ受けとらせ、第一回、第二回分の返却レポートを受け取らせる。まだスムーズとは言えない。

3、(レポート作成) テーマは、音声学についてどう思うか。

【①表に必要事項を記入(氏名、学年等)

②その上の空欄に「国語音声学 四月二

日 第三回」と記す。

③裏側に横書きで、「音声学についてどう思うか」を書く(画面)

4、(導入) 「ごきげんよう」の挨拶から開始。ゆつくりと音声学を楽しもう。

5、(講義)

1回 音声学とは(本書の目的と方針)
↓7ページ 前回の復習。国際音声記号

等軽く確認。

2回 単音(単音論)

仮名と単音→11ページ

【日本人は仮名一字で表される音を発音の最小単位と感じている。
「た」を極力スローモーションで発音する→

[sa]

[ɔ] → [j] → [s]

[j] [a] [i] 等を「単音」とする。(画面)

実際に「さ」を発音させる。[s]と[a]では、子音[s]のほうが母音[a]よりも短いことの確認。

音声記号→12ページ

【単音を表すには普通、国際音声学協会「国際音声記号」(IPA)を用いる。

音声記号は、小文字で表し、「」にいれて用いる。在来アルファベットで足りない分は、特別な記号を使う。(画面)

6、(レポート作成)「ごきげんよう!」の挨拶後、レポートの作成。テーマは「本日の感想」。提出等一連の流れはいつもどおり。

7、(反省) 三回目だがまだ初参加者が多く、遅刻・私語が多い。遅刻が多いのはやむをえないところもあるのだが、それを当然の権利と考える態度は改めさせなくてはならない。

☆第四回 四月二十八日(金)

メモリアルホール

「音声器官」「音声と音韻」

1、(開始前) あわただしくホールにかけつける。短時間の移動はきつい。パソコンの設定は次第にうまくなる。

2、(レポート用紙配布・返却) これはいつもどおり。画面表示もいつもどおり。

3、(レポート作成) 今回のテーマは、「国際音声学を実生活にどのように役立てるか」。

4、(導入) 「ごきげんよう」の挨拶等。次に、優秀レポート(OA)を紹介。成績優秀者は表五名、裏一名、表裏四名。表裏ともOAと評価された作品を読み上げる。

5、(講義) 気楽に学ぼうと伝えるのはいつもと同じ。同様にテキスト・ノート・レポートの重要性も伝える。

3回 音声器官(参考) ↓『国語要説』

「発音器官」ともいう

☆音声は、吐く息、つまり「呼気」を利用して発音される。したがって呼吸器官が発音器官を兼ねている。

☆喉頭には、「声帯」があり、呼気が通過する時に声帯を振動させると「こえ」を発生する。「こえ」を伴う音声を「有声音」、「こえ」を伴わない音声を「無声音」という。

☆発音器官の活動によって、種々の音声を形成することを「調音」といい、音声が生じる場所を「調音位置」という。(画面)

使用テキストでは「音声器官」が図示されていないので「国語学概論」で使用した『国語要説』の本文を引用し、解説。

4回 音声と音韻(参考) ↓『国語要説』

【「音声」発音された音のことをいう。生理的・物理的現象である
「音韻」具体的な音声から抽象して考えた共

通の音のことをいう。

☆我々は、内容(概念)を頭で、音韻におきかえ、それを音声として口から表現し、耳で音声を聞き、それを頭で音韻として受け取り、概念におきかえて理解している。】

(画面)

「音声」と「音韻」についても『国語要説』を引用。特に指導に注意したのは「音声」が具体的で「音韻」が抽象的であること。母音と子音↓13ページ「母音と子音」については画面表示のみ。

6、(レポート作成・提出)「ごきげんよう」の挨拶後、レポート作成。本日のテーマは、「音声器官」について思うこと。

7、(反省)学生にとっては「音声学」はなかなかなじめないようだが、「面白くなってきた」とレポートを書く学生は着実に増えている。

☆第五回 五月一二日(金)

メモリアルホール

「母音と子音」「基本母音」

1、(開始前)移動のあわただしさを切り抜ける秘訣は、休憩時間に研究室に戻らないこと。ニコマ分の用意をし、移動する。

2、(レポート用紙返却・配布)五回目なので、ようやくスムーズになってきた。

3、(レポート作成)今回のテーマは、「受験勉強と、大学での勉強との相違を論ぜよ」

4、(導入)「ごきげんよう」の挨拶後、優秀レポートの紹介。成績優秀者は表一名、裏一〇名、表裏五名。

5、(講義)前回の「音声と音韻」の軽い復習をしてから、今日の「母音と子音」に進む。

母音と子音↓13ページ

【☆単音を「母音」「子音」に二大別する。

☆「ん」「っ」以外の仮名の音の終わりの部分が母音である。

☆「さ」を延ばしていると聞こえる音が、「a」の音で母音、残りの(部分)「s」が子音である。

☆ある仮名の音を延ばして言うのは、その母音を延ばすこと。

☆「あかさたなはまやらわ」は同じ母音を持つ仮名を並べたものだが、「かきくけこ」はかならずしも同じ子音を持つ仮名を並べたものではない。】(画面)

「さ」を延ばすと聞こえる音が母音、残りが子音という考えには興味を示していた。基本母音↓15ページ

【「母音」 子音と異なり、舌・唇・歯などの調音器官が特定の位置に触れるとか、触れれば十分に近づくとかいうことなく発せられる音である。

「基本母音1番」 舌の主体部を出来るだけ前に、出来るだけ高く盛り上げて発した母音である。そして唇は左右に引き分けられる。

「基本母音5番」 舌を下げられるだけ下げ、引けるだけ奥へ引いて発した母音である。

「基本母音2・3・4番」 みな前母音、つまり舌の奥の方が盛り上がる母音の系列である。聴覚的に1番と5番との間を四等分する点にある母音である。

「基本母音6・7・8番」 同じ聴覚的間隔で延ばして行つた奥母音の系列、つまり舌の奥の方が盛り上がる母音の系列である。】

(画面)

基本母音1番から8番の図を理解させることに力点をおいた。

母音↓18ページ 母音については画面を見せるのみ。

6、(レポート作成) 「ごきげんよう」の挨拶の後、レポート作成。本日のテーマは「感想」。

7、(反省) 本日の主題の「母音」「子音」は誰でも知っていきそうだが、実は観念的にしかわかっていない。実際に声を出して確認するのが一番。学問は実践あるのみ。

☆第六回 五月一九日(金)

メモリアルホール

「母音」

1、(開始前) ホール到着後のセッティングはすばやく五分以内でできるようにした。

2、(レポート用紙の返却と配布) いつもどおり。レポートの本日のテーマは、「仮名と単音」について論述せよ。

3、(導入) 「ごきげんよう」の挨拶後、優秀レポートの紹介。表五名、裏七名、表裏三名。

4、(講義) 「母音」について、気楽に楽しく学んで行こうと伝える。

母音↓18ページ

【基本母音記号↓ [i] [e] [ɛ] [a] [ɑ]

[ɔ] [o] [u]

第3図(本来の舌の位置) ↓ 第4図(単純化した舌の位置) ↓ 第5図(発音記号で表した舌の位置) ↓ 各辺は母音と非母音を分かつ境界↓言語の母音は必ずこの四角形の内側に存在する(顔を横から見た時の下の位置である)

☆ [i] は唇を丸める度合いが最強 ↓ [e] に向かうに従ってその度合いが弱まる ↓ [ɛ] は丸めない(この系列の母音を「奥母音」という)

☆ [ɑ] は唇を左右に引く力が最強 ↓ [ɔ]

になるとその力はなくなる(この系列の母音を「前母音」という)

☆ [ɛ] は [e] の舌の位置で唇の丸めのない母音記号である

☆ 「中古母音」とは舌の盛り上がる場所が [e] のように奥でもなく、[ɛ] のように前でもない母音のことをいう

☆ 「狭母音」とは、[i] [e] [ɛ] のように「口蓋」と舌との間に空間を少ししか残さない母音のことをいう、「広母音」とは [ɑ] [a] のような母音のことをいう。

☆ 「半広母音」とは、[ɛ] [ɔ] [o] のような音を、「半狭母音」とは、[e] [o] [u] のような母音をいう。(画面) 以上、実際に発音して確認する。

日本語の母音↓21ページ

「日本語の母音」については画面表示のみ。

5、(レポート作成) 「ごきげんよう」の挨拶後、レポート作成、本日のテーマは、「感想」。

6、(反省) 授業はスムーズに進むようになった。こちらの手順もよくなったのだ

ろうが、学生たちが、やっと音声学を飲み込んでくれたことが一番大きいと思う。

第七回 五月二六日 (金)

メモリアルホール

「日本語の母音」

1、(開始前) パソコン準備、レポート配布・返却。この作業は五分以内で完了。

2、(レポート用紙を返却・配布) 画面で指示。本日のテーマは「母音」について論述せよ。

3、(導入) 「ごきげんよう」の挨拶。優秀レポートの紹介。表八名、裏三名、表裏五名。

4、(講義) 日本語の母音↓21ページ

【E】イ段音の母音は「i」である。しかも、基本母音そのものと言いたくらくらに狭い、引き締まった細い感じの音である。

【e】エ段音の母音は基本母音2番と3番との中頃を中心とする若干の範囲内の母音である。どちらかと言えば、3番「e」の方が

適当である。しかし普通は特殊な記号を避け、【e】でこの母音を表記する。日本語には【e】と【ɛ】の区別、対立がない。

【ɛ】ア段音の母音は基本母音4番、5番を含むかなり広い範囲の母音である。4番は、明るい、軽い、多少おつちよこちよいな感じの音。5番は、暗い、重い、もっさりした音、よく言えば深みのある音。

【o】オ段音の母音は基本母音6番と7番との中頃を中心とする若干の範囲内の母音である。6番であることはまずないが、7番であることはある。唇の形に関して、日本語の母音中ただ一つの積極的な母音であり、唇を丸める。

【ɔ】ウ段音の母音は基本母音8番からは随分遠い音である。8番では唇の丸めが強烈であるが、ウ段音の母音には唇の丸めはない。8番は奥母音であるが、ウ段母音はそれよりはかなり前に寄った母音である。【ɔ】は【ɔ】から唇の丸めを取り去った母音を表す。(画面)

無声母音↓24ページ

無声母音については画面表示のみとし、次回に行くことにした。

5、(レポート作成) 「ごきげんよう」の挨拶をしてレポート作成。本日のテーマは、感想。

6、(反省) 中間点目前。マンネリ化せぬよう本授業を公開授業にする。学生にも伝えた。

☆第八回 六月二日 (金)

メモリアルホール

「無声母音」「子音」

1、(開始前) ホールが薄暗いが照明の扱いがわからない。情報の方にヘルプ。本日のテーマは、【ɔ】について論述せよ。

2、(導入) 「ごきげんよう」の挨拶後、優秀レポート紹介。表九名、裏が一二名、表裏が四名。また、今回から多欠者についても画面で掲示し、出席を促がした。

3、(講義) いつもどおり、ゆっくりと音声に興味がわくように学ぼうと伝え、始める。

無声母音→24ページ

【(1) 咲くそう→無声(声帯が振動してな

い) k(無声) s(無声) →母音が無いよう

(2) 咲くまで→有声(声帯が振動している)

k(無声) s(有声)

(3) 咲きそう→無声(声帯が振動してない)

k(無声) : (無声) →母音が無いよう

(4) 咲きます→有声(声帯が振動している)

k(無声) : (有声)

☆(1)と(3)を区別する要因は「k」が
終わったあとjの舌の形の相違に存する。

☆(1)と(3)の関係は、(2)と(4)
の関係に等しい。

☆日本語はそれほど母音に富んでいない。

☆無声子音の直前の「き、び」「く、ぶ、し
ゆ、ちゆ」は母音を持たず、その代わりに

無声母音「k」「s」を持つ。

☆無声子音の直前の「し、ち、ひ」「す、つ、

ふ」は一般に無声母音すらもたない。↓

「シカク」「シシヨ」↑↓「シユカク」

「シユシヨ」(画面)

全員で発音の実践。無声母音の確認。中

には無声母音で無い学生も当然いる。
子音→26ページ

【★「子音」という音は存在するか

☆「か」の音を「k」と「c」とに分けて「k」
だけを発音しようとしてもできない。

西洋人が「k」だけを発音したつもりで発し
た音は、実は「k」のあとに無声母音「c」
が続いているのである。

☆「k」で「c」という音があるのではなく、
むしろそれに続く母音の始まり方を規定す

る力としての「k」があるのだ、という考え
方が可能となる。

☆「s」に必要なのは、「s」そのものでは
ない。必要なのは「s」から「o」への移り

である。それと「o」である。この方は、ま

さに「o」そのものが必要なのである。

☆音節の始まりの子音というものは母音の
始まり方を指定する一つの力であるが、自

分は陰について母音を操作する黒幕的存在で

あると言える。】(画面)

著者川上氏の「黒幕的存在」という表現
は笑いをさそった。

持続子音と開放子音→28ページ 本テ
マについては画面表示のみ。

4、(レポート作成)「ごきげんよう」の
挨拶後、テーマ発表。「e」について論
述せよ。

5、(反省) いよいよ公開授業が正式に決
定。第一〇回に行く。学生にも伝えた。
今の授業は学生とのコミュニケーション
がとれていてとてもいいと思う。自信を
もって行いたい。

☆第九回 六月九日(金)

メモリアルホール

「持続子音と開放子音」

1、(開始前) レポート用紙返却・配布後、
レポート作成、「e」について論述せよ。

2、(導入)「ごきげんよう」の挨拶の後、
優秀レポート紹介。成績優秀者は表一〇

名、裏九名、表裏三名。多欠者(八回中)
一二名を、注意、危険、超危険、抹消の

四段階に色分けして掲示、注意を促す。
なお、教育実習等公欠にあたる欠席は最

終的に処置する。

3、(講義) ゆっくりと音声に興味がわくように学ぼうと呼びかけて始める。

持続子音と開放子音→28ページ

【西洋流の考えでは、「すそ」[susso]の「ス」評も[s]であり、「そ」[so]の始めの音も[s]である。ただ、量的に前者が大[s]が長く続く、後者が小である[s]が短くすぐ母音へと続く、とされるだろう。しかし、日本語では、前者[su]の[s]はその持続部(無声母音に続く)が役をしており、後者[so]の[s]は母音(有声母音に続く)への移りが役をしている、と考える。両者は質的に異なる。

☆前者を「持続子音」、後者を「開放子音」と呼び、区別するべきである【(画面) 学生にとっては「持続子音」「開放子音」の理解は非常に難しいもののようにだ。
4、(レポート作成)「ごきげんよう」の挨拶後作成。「ご」について論述せよ。
5、(反省) 次回の最初のテーマは、「最近、国語音声学、を学んでプラスになっ

たこと」と教える。理由は「公開授業だから」というと大笑いとなった。

第一〇回 六月一六日(金)

メモリアルホール公開授業

「子音」「持続子音と開放子音」

「日本語の子音」

1、(開始前) レポート用紙返却・配布はいつもどおり。学生は心なしか緊張気味。レポートのテーマは前回伝えたとおり、「国語音声学を受講して、最近日常生活で面白かったこと」。

2、(導入) 本日は公開授業であること、いつもどおり、元気に参加するよう伝えた。成績優秀者は、表一四名、裏一名、表裏二名。多欠者(九回中)一二名。

4、授業

☆公開授業にあたって

今回はレジュメを使用(受講生も参加者も)

①シラバス ②テキスト『日本語音声学概説』(川上葵著・おうふう) 目次 ③本書

の目的と方針 ④基本母音図 ⑤子音

⑥持続子音と開放子音 ⑦～⑨日本語の子音 [p]、[b] 付 [β]、[t]、[d]、[k]、

[g] [ɕ] 付 [ɸ] ⑩子音の分類 ⑪「国

語学概論」テキスト『国語要説』(池上秋

彦他著・おうふう) より「第二章 音声

と音韻」一 音声と音韻 二 発音器官

三 単音 ⑫(一) 母音 (二) 子音→基

本母音・母音三角形・子音一覧 ⑬四音

節 (一) 音節の構造 (二) 音節の種

類 ⑭音節表→清直音、清拗音、濁直音、

濁拗音、半濁拗音 五「アクセント」(以

上レジュメ)

【☆五十音図

あいうえお かきくけこ さしすせそ た

ちつとこ なにぬねの はひふへほ まみ

むめも やいゆえよ らりるれる わいう

えを(44音節)

☆いろは歌

いろはにほへと ちりぬるを わかよたれ

そ つねならむ うゑのおくやま けふこ

えて あさきゆめみし ゑひもせす(47音

節)

☆母音 (原則として有音)

あいゝえお (aiweo)

☆無声子音

かきくけこ (k=破裂音) さしすせそ

(s=摩擦音) たちつとと (t=破裂音)

はひふへほ (h=摩擦音) ↓ぱぴぷぺぽ

(p=破裂音) ↓ばびぶべぼ (b=破裂音・

有音)

☆有声子音

なにぬねの (n=鼻音) まみむめも (m=

鼻音) やいゆえよ (j=摩擦音・半母音)

らりるれる (r=摩擦音) わいうえを

(w=摩擦音・半母音) (画面)

五十音図を見直した。参加者も含め、全員、音声学の初心に帰る「公開授業」である。

無声母音↓24ページ (資料⑤)

【☆無声子音 (k, s, t, h) の直前の「き、び」

(無声母音)「く、ぷ、しゅ、ちゅ」(無声

母音)は母音を持たず、その代わりに無声

母音 [ɸ] [i] を持つ。

「き、び」 [iあひ] → k, s, t, h

「く、ぷ、しゅ、ちゅ」 [ɸあひ] → k, s, t, h

☆無声子音 (k, s, t, h) の直前の「し、ち、

ひ」「す、し、ふ」は一般に無声母音すらも

たない(無声母音がさらに弱く・短くなっ

たものと考ええる)。

「し、ち、ひ」 [ɸなし] → k, s, t, h

「す、し、ふ」 [iなし] → k, s, t, h

☆「シ△(無声母音なし) カク」「シ△(無声

母音なし) ショー」 ↑ ↓ 「シユ△(無声母音

あり) カク」「シユ△(無声母音あり) ショ

ー」

☆「スユ△(無声母音なし) シユ△(無声母

音あり)」 (画面)

無声母音についても見直し、初めて聞く人むきだが、受講者にも大変復習の効果がある。

子音↓26ページ (資料⑤)

★「子音」という音は存在するか

完全に受講者にとっては復習だが、再確認できたと好評。

持続子音と開放子音↓28ページ (資料⑥)

これについては資料を参考、画面表示のみ。

日本語の子音↓30ページ (資料⑦) これについても資料を参考、画面表示のみとした。

5、(反省) レジュメと画面を駆使し、わかりやすく今までのおさらいをした。受講生にとっても復習という点で、とても有意義な公開授業だったと思う。今回は特別に公開授業サーブスイベントとして、無声子音を意識しながら、歌を歌うことにした。

【遠くへ行きたい 歌・ジェリー藤尾 作

詞・永六輔 作曲・中村八大

※無声子音、[ɸ, s, t, h] に注目

一、しらないまちを あるいてみたい

どこかとおくへ い (ゆ) きたい

しらないうみを ながめていたい

どこかとおくへ い (ゆ) きたい

とおいまち とおいうみ ゆめはるか

ひとりたび

二、あいするひと めぐりあいたい

どこかとおくへ い(ゆ)きたい

あいしあい しんじあい いつのひか

しあわせを

あいするひと めぐりあいたい

どこかとおくへ い(ゆ)きたい【(画面)

5、(レポート作成)「ごきげんよう」の

挨拶後、レポート作成。「本日の授業中、

最重要と思われること」について感想を

述べよ。

6、(反省) 公開授業で緊張した。緊張す

ると早口になるのが欠点だが、大体うま

くいったと思う。学生もよく協力してく

れた。参加学生三名、参加教員三名にも

感謝。

☆第一一回六月二三日(金)

メモリアルホール

「持続子音と開放子音」「日本語の子音」

- 1、(開始前) レポート用紙返却・配布。テーマは、無声母音について論述せよ。
- 2、(導入)「ごきげんよう」の挨拶。優秀レポートの紹介。表七名、裏一七名、

表裏五名

多欠者(二〇回中)は、一五名。

【☆第二回(次週)より①テキスト②ノー

ト③レポート用紙、チェック開始。①②③

までを順番に重ねて壇上に提出(②③は第

一回から順に重ねる)。その時に、④当日用

のレポート用紙に必要事項を記入の上、持

って来る。①②③をチェックした後に④に

印鑑を押して提出完了です。二回は、

一・三・四年・大学院(二年を除く)の全

出席者と、〇Aをもらったもの(全学年)

をチェックします(一四時三〇分～一四時

五〇分)(一五時五〇分～一六時一〇分)。

一三回は、二年の全出席者と、〇Aをもら

ったもの(全学年)。一四回・一五回(試験

日)は、残り全員。一五回(試験日)は、

小論文提出で試験とする。テーマは二三回

発表。用紙は前もって配布(いつものレポ

ート用紙・表。裏は一五回当日用)。提出時

間は一四時四〇分～一五時一〇分(三〇分

間)。(画面)

いよいよテキスト・ノート・レポートの

三点セットのチェックがスタート。画面にて確認。

持続子音と開放子音→28ページ

【☆西洋流の考えでは、「pɒŋ」[sɒsɒ]の

「p」[sɒ]も「s」rɒŋrɒ、「ŋ」[sɒ]

も「s」である。ただ、量的に前者が大「s」

が長く続く、後者が小である「s」が短く

すぐ母音へと続く、とされるだろう。

☆しかし、日本語では、前者[sɒ]の「s」

はその持続部(無声母音に続く)が役をし

ており、後者[sɒ]の「s」は母音(有声

母音に続く)への移りが役をしている、と

考える。両者は質的に異なる。

☆前者を「持続子音」、後者を「開放子音」と呼び、区別するべきである。

日本語の子音→30ページ

[ɸ] ([h]) → [p] → [b] [t] → [d]

[k] → [g] [m] → [n] → [ŋ] → [ɲ]

[s] → [z] (このzを日本人は発音できな

い) [ɸ] → [ɸ] (このɸを日本人は言ひな

く) [j] → [w] (半母音) (画面)

公開授業では、さっと目を通した部分。

子音についてじっくりわかりやすく解説した。

5、(レポート作成)「ごきげんよう」の挨拶。テーマは、前回のお礼で、感想。

6、(反省) 最初に、前回特別参加者のレポートを読み上げ、感謝。

第二二回 六月三〇日(金)

メモリアルホール

「日本語の子音」

1、(開始前) レポート用紙返却・配布。テーマは、「子音」について論述せよ。

2、(導入)「ごきげんよう」の挨拶。優秀レポートの紹介。表七名、裏五名、表裏一名

多欠者(一一回中)は一六名。四段階で注意を促す。また今回からのテキスト等チェックについても触れ、画面表示をした上で、授業前、授業後にチェック。

3、(講義)

日本語の子音→30ページ

[p]

【☆jの子音 [p] は母音 [a, i, u, w, e, o] の前 [j] の「*モ、び、ぶ、べ、め*」 [pa, pi, pu, pe, po] とjの子音(開放子音)を作る。また、逆に母音の後に付いて促音と称する一種の音(持続子音)を作る。

☆ [ippo] の第一の [p] は「っ」(促音)に相当する。これは、開いていた唇が急に閉じるよう、そのつばらの間閉じていることを表す(持続子音)。これに反し、[ippo] の第二の [p] は閉じていた唇が急に開くことを表す(開放子音)。

☆ [p] は、唇が閉じる動作ではなく、唇が閉じているという状態を主として表していると解される。母音の状態からその「*モ*」の状態へ移るためには、やむなく唇が閉じるという動作が起こる。また [p] の状態から母音の状態へ移るためには、やむなく唇が開くという動作が起こる。

☆唇を閉じること、またはそれによって生ずる音を「入りわたり」(↓持続子音)、唇を開くこと、またはそれによって生ずる音を「出わたり」(↓開放子音)という。そし

て、唇の開いている期間のことを「持続部」とする。

☆拗音「*びゃ、びゅ、びょ*」は、[p] の後 [j] が付き、その [j] から直ちに [a] や [ɛ] や [o] に移る音である。この [j] のように、母音の隣にある、ごく短い弱い母音を「半母音」とする。「半母音」は [j] で表す。

☆要するに、[p] は、開放子音としてパ行音を作り、また [p] の直前の持続子音として促音「っ」に該当する。(画面)

[p] を中心に、持続子音、開放子音の相違、さらに半母音についても具体的にわかりやすく説明した。とくに「いっぽ」を動作にしてみたら大うけした

4、(レポート作成)「ごきげんよう」の挨拶後、テーマは、「開放子音」について論述せよ。

5、(反省) ノート以下の三点セットのチェックをするのは正直言ってつらいが、一生懸命まとめてくる学生は大切に評価したい。

☆第一三回 七月七日

メモリアルホール

「日本語の子音」[b]

- 1、(開始前) レポート用紙返却・配布。
テーマは、[p] について論述せよ。
- 2、(導入) 「ごきげんよう」挨拶後、成績優秀者発表。表二二名、裏八名、表裏二名。多欠者(一二回中)は一六名。四段階に分けて注意。テキスト等についてもチェック。

3、(講義)

[b] 付 [β]

- ☆ [b] は、無声子音 [p] に対する有声子音である。[p] は閉鎖音でありかつ無声音なので持続部を聞かせられないが、[β] は有声音なので、特別に努力すれば、かすかであるが持続部を聞かせることが出来る。
- ☆ [b] は開放子音としてバ行音を作る。
- ☆ [p, b] や、[t, d, k, g] は閉鎖音だが、破裂音と見做す。
- ☆ 日本語の [b] は破裂が弱い、語頭以外で

は特に弱く、摩擦音 [β] である場合がある。

☆ [β] は [F] に対する有声音である。】

(画面)

前回の [p] をうけて [b] について詳しく解説。音の違いが口の使い方によることを実感。

[F]

[F] については、軽くおさらいをした。次回、[β] と関連付けて講義する。

4、(レポート作成) 「ごきげんよう」の挨拶。テーマは、感想。

5、(反省) 公開授業後、学生とのコミュニケーションが一段とよくなったと思う。公開授業を行って本当によかった。

☆第一四回 七月二一日(金) 補講

(出張で休講の補講) 授業評価期間

メモリアルホール

[t] [d] [k] [g]

- 1、(開始前) レポート用紙返却・配布。
テーマは、[b] について論述せよ。
- 2、(導入) 「ごきげんよう」の挨拶後、

成績優秀者発表。表一〇名、裏七名、表裏一名。

多欠者(一二回中)一六名は、画面表示の上、壇上に呼び出して、警告。次回(試験日)は、小論文提出で、テーマは「日本語の音声の特質について論述せよ」であることの確認。

3、(講義)

[F]

☆ [F] は [t] の直前の持続子音としては促音「っ」に該当する。開放子音としては、普通「た、て、と」を造るだけである。

☆ [t] は [s] [ʃ] と固く結びつく [st] [sʃ]

[F] と [st] [sʃ] の単位を作る。

[d]

☆ [d] は、無声子音 [t] に対する有声子音である。[a, e, o] の前 [t] として、「だ、で、ど」を作る。[di, dei] は、外来語に限る。

☆ [t] 同様、日本語の [d] が歯の音であるのに対し、英語の [d] は歯茎の音である。
☆ [d] は [z] [ʒ] と固く結びつく [dz] [dzʒ] と [st] [sʃ] の単位を作る。

[k]

☆ [k] は [a, i, u, w, e, o] の前について「か、き、く、け、こ」を作る。また「け」を介して「a, w, o」と結びつき「きゃ、きゅ、きょ」を作る。

☆ 舌の奥が持ち上がって軟口蓋につくのが [k] の基本。但し、後に来る音が「i」「e」である場合、舌の前が硬口蓋につく。これを前舌音 [k] と言ふ。

☆ 持続子音の [k] は [kiko] のように開放子音 [k] の直前で促音になる。

[g] [ŋ] 付 [k]

☆ [g] は無声音 [k] に対する有声音。開放子音として「が、ぎ、ぐ、げ、ご、ぎゃ、ぎゅ、ぎょ」を作る。後に来る母音、半母音によって舌の扱いが異なるのは [k] と同じ。

☆ [g] に似た音に「[ŋ]」がある。これは舌の位置は [g] と同じだが、その持続部において空気が鼻からのがれている点だけが

[g] と異なる。(画面)

[t] から始め、上記の子音の解説。講義

としては最終回。皆元気よく音声を出していた。

5、(レポート作成) 「ごきげんよう」の挨拶。テーマは、感想。

6、(反省) とにかくよく皆ついてきてくれたと思う。苦手な音声学を皆が興味を持つようになり、好きになってくれたらしいのがよかった。

☆ 第一五回 七月二八日 (金)

試験期間

メモリアルホール

小論文提出

1、(授業) レポート用紙返却・配布。

2、(レポート作成) テーマは、日本語の音声の特質について論述せよ。

3、(導入) 「ごきげんよう」の挨拶後、成績優秀者発表。表五名、裏九名、表裏二名。

続いて皆勤賞、二六名を発表。多欠者

(二三回中) 二三名に注意。

4、(終了) レポート提出後、順番に終了。

5、(反省) 音声学もやればおもしろい。理屈ではなく、実感させることが一番だと思う。デジタルよりもアナログ、抽象より具体。音声学などはまさにそれがすべてだと思った。